

A児と雨 ～複数の保育者で理解を深める～ 福岡市立和白幼稚園（福岡県福岡市）

【5歳児】

保育者同士が思いを共有し合いながら幼児の育ち合いの姿を見て取れるように、事例を常に3人の観点で分析する。

5歳当初のA児への保育者の思い

- (C保育者) クラスは4歳児の時と同じメンバーなのに返事をするときも友達から注目されると極度に緊張する。
 (D保育者) A児には、5歳児になった意気込みは感じられたが、何か面白いことをしてくれそうな期待をもって、常にC保育者の回りにいるように感じた。友達に対しては強気ではあるが、自分の不安を隠しての強がりに見えた。
 (E保育者:旧4歳児の担任) 自分の思いを強く持っているものの、自分の思いをうまく表現することができなかった。集まりの場などで正義感から友達に注意しようとするが、いざこざになることが多かった。自分の思いを素直に表現し、クラスの友達と意欲的にかかわって欲しいと思う。

事例1：雨との出会い

保育者 = T

幼児A	保育者
A児：「これからいっぱい降ると、お母さん言いよった」 A児：「見て、空も暗いやろ」 A児：「 <u>染み込みよると。だんだん攻めてきよるね、あそこあそこが繋がった</u> 」 A児：「見て、面白いやろ、水が攻めて来よる」(4歳児に言う) A児：「そりゃあ雨が いっぱい 降ってきたけん、見て池も出来たよ」 A児：「合体してこの穴に入るっちゃない」 B児：「 きっとそうなる と」 A・B児：「 ようし、見とってん 」 A・B児：「 <u>ここから上がらんで、あっちから、傘も向こうでたたんで、他の水が来たらわからんけん</u> 」と登園する他の子に言う。 A児：「わー来た来た、ほら繋がった。来た来た穴にはいった。 <u>先生、僕が言ったとおりやろ</u> 」 数人：「僕も考えとったよ」 A・B児：「穴がないとこの水がここ(テラスの高さをさわり)を越えて上がってくる」 A・B児：「いいね、でも先生どんなもので塞ぐといい？」 (プリンカップ、ビニールを使うが失敗) A・B児：「先生、 <u>今日はできんね</u> 」	「A児くん、雨やまないね」 「ほんとう？」 「A児くんだんだん白い土がなくなるね」 「音が強くなったね」「川が2本来たね、これからどうなると思う」 「ほんとう？」 「ほんとかなあ」 「見て、面白いやろ、水が攻めて来よる」 「ほんとだ、当たったすごいね」 「みんなすごいね」「なんで穴があると」 「では穴をふさいでみる？」 「そうね…」 この方法は無理ではないかと考え、落ちてくる雨を集め、量として実感させる方法に展開してみよう、それには雨どいに注目させればよいと思った。
A児：「雨やけん、どこにも降りよると」 B児：「ほら屋根があるけん」(テラスの屋根を指差す) A・B児：「 わかった！あれが集めよる 」 (テラスを行ったり来たりしながら雨どいを見始める) A・B児：「 分かった分かったこの縦についとるものやん 」 「 <u>これこの中に続いとる</u> 」 (側溝に続くパイプ発見) (テラスを歩き来して水が漏れているところを探していたが、見付けきれない)	「雨は砂場、土山、裏の野菜の上にいっぱい降っているね」 「じゃあどうして私たち雨にぬれないの？」「屋根に落ちた雨はずべてどこにいくのかな？」 「でもすぐにいっぱいになるかもよ」 「でも本当にこのパイプの中に雨の水が流れてるかな？見えないしね」 「じゃあ雨でも集めようかね？」

分析及び考察 何気ない会話から始まったのだが、その会話をひろうことで、A児やかかわった幼児の思いが分かる。

T「雨やまないね」から始まった会話だが、母親の言葉「これからいっぱい降る」と空の情景と結びつけて答えている。保育者との対話を心地良く感じているのだろう。(対話する姿勢)

「染みこむ...攻める...繋がる...池...穴(側溝)...」雨降りでの園の様子を経験をつなぎ合わせている。4歳児に自分から「見て、面白いやろ、水が攻めて来よる」と言ったことから、新たな感動が気持ちを揺さぶり始めてきたことが読み取れる。それは4月の自信なさげなA児とは違った姿として見てとれたからである。(共有する喜び)

T「ほんとかなあ」の言葉を受けて、「きっとそうなる」「ようし、見とってん」(挑戦する心)と言い、予想を検証しようと登園後に整理して伝えた。「先生、僕が言ったとおりやろ」で予想が当たった感動と自信を味わっている。

「今日はできんね」(自己の限界を知ろうとする心)では自分たちの限界を知ったがあきらめではない。

「わかった！あれが集めよる」「分かった分かったこの縦についとるものやん」(あくなき探求心)と追求し始めた。

C保育者: A児の思いを探りながらの対話で、初めて彼の興味や好奇心を感じ取った。このかかわりを続けることが、A児の変容の糸口になるのではないかと、漠然とではあるが感じた。

D保育者: C保育者が数日前から上(テラスの屋根)を見ていた。何か題材を探していたのではないかと考えていた。これを読み、A児の興味を探り、題材との接点を見つけていたのだと思った。

E保育者: 雨が流れてくる様子を見ているのを隣のテラスから見て、何か始まったなとワクワクした。C保育者が排水溝と雨水の関係や量として感じさせたい思い、問いかけの深さに驚いた。

事例2：ポットン見つけた

6月8日、雨が降った。登園してきたA児が「先生！ぽたんぽたん落ちよところを見つけた。来て、集めて」以前雨を集めたピンクのバケツを持って行くと、「ここ、ここ」私は興味が続いていたことに、先日のかわりはよかったんだと確信した。T「どれ位溜まるかな」A児「半分くらいかな、前もあんまり溜まらんかったもん」雨を集めたことを覚えている、同じバケツを持ってきたので思いが再現しやすかったんだ。T「いつまでしとく？」A児「明日の朝まで」T「いいね、明日の朝までね、それでも半分位？」A児「どうかな？少し多いかもしれんけど半分位」とやりとりをし、「やはり雨を測った量を覚えているんだ」と思い予想はどうかワクワクしながら保育者は「当たるといいね」と期待をもたせた。（A児は早帰りだった。2時に見ると半分位になっていた。5時、D保育者から「いっぱいですよ」と声をかけられ、早く溜まるな、タイヤがいいかなと思ったが、いや同じ物の方が幼児にとっては比べやすいと考え同じピンクのバケツを持ってきた）

分析及び考察

「先生！ぽたんぽたん落ちよところを見つけた。来て、集めて」とA児の雨への興味が5月下旬から続いていること、雨の溜まりそうな場所を見つけたという興奮が分かる。自分の思いをC保育者に伝え、もう一度雨を集めてみたいと意欲的に活動する姿が見られた。

T「どれ位溜まるかな」「半分くらいかな、前もあんまり溜まらんかったもん」やT「いつまでしとく？」「明日の朝まで」と5月26日に雨を溜めた経験から、自分の考えを素直に表現している。また、T「いいね、明日の朝までね、それでも半分位？」「どうかな？少し多いかもしれんけど半分位」と保育者の投げかけに対して、経験したことを基に自分なりに考え、予測を立て、そのような結果になるのか楽しみにしている。また、保育者とその思いを共有しているのも楽しみのひとつであるようだ。

同じ物の方が幼児にとっては比べやすいと考え、同じピンクのバケツを持ってきた。まだ活動し始めの幼児にとって、量を比べやすい同じピンクバケツを基準にしようと考えた。

C保育者：A児の興味が続いている。好奇心が溜めようという行動に現れてきたことに私もワクワクしてきた。「バケツいっぱい」というD保育者の知らせに助けられ、明日を期待する。

D保育者：A児の意識が続いていたのに驚いた。バケツに溜まった様子を見て、午前中のC保育者とA児のやりとりの意味が分かった。バケツの次に出すのはタイヤだと思ったのに、C保育者は同じピンクバケツを出したことで、幼児の思いの連続を大事にしようと思っているのだとわかり、反省した。

E保育者：幼児の意識や興味が続いていることに驚いた。A児がバケツの様子を見に行き、自分の考えをC保育者に伝えている姿を見て、雨に興味をもっていること、楽しんでることが伝わってきた。ピンクのバケツをひとつの基準にするという考えに、自分だったら他のバケツも出していたのではないかと思い、何に気付かせたいか考える必要を感じた。

事例3：雨を集める

次の朝、バケツ2つにいっぱい溜まった雨の水を見て、「うわーこんなに溜まると、先生途中で換えた？」といいながら登園してくる友達に説明している。T「ぽたんぽたんの水って時間がたつと多くなるね」子ども達と感動を共有しながら、この後どのように展開しようかなと考えながら、私はその場を離れた。

分析及び考察

「うわーこんなに溜まると、先生途中で換えた」と、昨日立てた自分の予想以上に雨が溜まっている様子を見て、驚きや雨のすごさを、経験を通して感じている。また、他の幼児に自分の経験した感動を伝え、思いを共有したいというA児の思いが他の幼児にも広がってきている。

C保育者：A児が感動を友達に生き生きと話している、この意識をもっと高め追求させたい。『雨』は他の幼児とも共有できる題材なのだ強く感じてきた。今後の展開のためには教師が『雨・水』にかかわる教材研究をし、幼児の様々な気付きの予想をしないといけないと考えた。

D保育者：他の幼児と共有し始めている姿に、雨の題材は幼児にとって共有できるのだろうと私も確信した。C保育者の思いを共有し嬉しくなる。

E保育者：興奮して話すA児や他の幼児を見て、思いを共有していることが分かった。この水をどうしていくのか楽しみである。



みどころ

集団生活であっても、一人ひとりの子どもを理解して援助する必要があることは当然のことであり、こうして複数の保育者がそれぞれの視点で分析したことを表すことで、理解が深まっています。また、幼児への理解にとどまらず、保育者の援助についても理解し合い高め合うことに結びつくことが期待できます。

一人の子どもに注目しても、子ども同士が互いにとっての豊かな環境になっていることが分かります。